

# 国際交流センター

## NEWSLETTER

Mar. 2015 Vol.38

### 国際交流センター長 退任の挨拶

#### 小山 俊輔

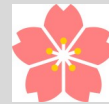
七年にわたって勤めた国際交流センター長の任を、やっと退くこととなった。西堀初代センター長の描いた未来像に少しでも近づけたとしたら幸いであるが、この七年の歳月に評価をいただくにはまだまだ時間がかかるであろう。相棒になったスーツケースの傷や剥がれかけたシールの一つ一つに記憶がこもっている。戦車が出動したクライストチャーチの廃墟や、反日暴動のさなかの上海を歩いた記憶。この仕事をしなければ出会うことのなかった多くの人々の表情。そして飛行機の機内の静寂。

この七年の間に痛感したのは、国際交流では大学の総合力が問われることである。まず世界レベルで高度な研究をしていないと、海外の大学から相手にされない。日本に行って勉強したいと思わせる魅力的な研究をしていることが、交流を進める第一の条件である。また留学生を受け入れて教育する力、また大学から留学生として学生を堂々と送り出すための外国語教育や専門教育などの質が常に問われる。またそれらの研究教育を通じて海外の大学と共同作業をするためのガバナンスである。日本の多くの大学には、とくに最後のものがかなり不足しているのが現状である。まだまだ国際交流が「おつきあい」であり、「余暇の仕事」であるという感覚が生き続けているように思う。

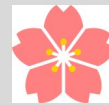
特に国立大学は、文科省の軒先を借りて個人が好きな研究をしているという状態が長く続いてきた。研究者がA大学にいるのもB大学にいても、それはたまたまのことであり、やっていることは自分の研究である。研究教育以外のことはいやいややる「雑用」であり、できるだけ係わらないようにすることが研究者として成功する技法だった。ところが大学を巡るゲームのルールははっきりと変わった。それぞれの大学は自分の手で自らを世界一地域社会から文字通りの国際社会まで一に積極的に位置づけることなしに生き続けることができなくなったのだ。これまではどんな学生を集めて育てたいのか、大学が社会でどのように貢献するのか考えることもなく自分の好きな研究をやってくれた。こうして自分を愛おしく養ってくれるはずの大学が、いつの間にか生き残りの危機に瀕している。現在の高等教育改革が財務省のペースで進んでいて、高等教育のありかたなど考えていないという批判はよく聞かれる。ところが大学自身が高等教育の設計図のことなど一切考えずにやってきたのが実情であり、そのつけが回ってきただけだ。この問題が集中的に現れるのが国際交流である。たとえば女子大に女子教育の専門家がいらないのはなぜですかと海外の大学から尋ねられたら、どう答えたらよいのか。多くの国立大学は、五目並べしか知らないのに国際的な囲碁大会に出場してしまったのだ。古いゲームと新しいゲームのルール間で翻弄されてきたのがこの七年間であった。

(P2へつづく)

#### Inside This Issue



小山センター長  
退任の挨拶



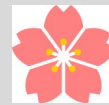
卒業生の声(留学生)



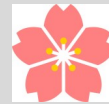
ベトナム教員派遣事業報告



トビタテ！留学JAPAN  
日本代表プログラム 2名



お茶の水女子大学  
大学間連携イベント  
「国際ボランティアを知ろう」



センター及び国際課の活動  
&来訪者



小山センター長



グローバル化という現象は我々の想像を遙かに超えるスピードと規模で進行し、国際的なレベルで優秀な学生の奪い合いが始まっている。大学は国際的な共存と競争のダイナミズムの中に投げ込まれてしまった。そのなかで研究大学のブロック化が進み、私は地域のトップ大学と組むべくチャンスを得てはそれに取り組んできた。また一方で大学を常に学びたいものに関われた状態にする努力もしてきたつもりである。ブロック化とオープンネスと言う矛盾した目標を実現するための制度設計はもともと私の権限を越えていたし、もはや私の仕事ではない。その課題を認めるだけで、非力な私の仕事は終わってしまった。

最後にこの七年間、私を支えてくれた国際課の職員、センターのスタッフの皆さんに心から感謝申し上げたい。様々な形で助力や支援がなければ、私は何もできなかった。

## 小山センター長 活動履歴

2008年4月にセンター長就任。以後七年にわたって大学の国際化を推進する。特にベトナムを中心としたアジア地域との関係強化、神戸大学を中心としたコンソーシアムによるEUとの関係強化に取り組む。国立大学協会国際交流専門委員、学生支援機構専門委員を歴任。JICA と連携して、国際協力をテーマにした教育活動を進める。2011年のNZクライストチャーチ震災で、佐久間副学長（当時）と現地対応を行った。直後の東日本大震災では、すでにあった女子大の国際協力ネットワークを生かしてボランティア学生の活動を支援する。在任中に協定を締結した大学に、大連理工大学、ハノイ大学、東海大学、ガジャマダ大学、チッタゴン大学など。

## 卒業生の声（留学生）



### 最高の幸せを味わうことができました

**申 麗紅** 生活環境学部食物栄養学科（中国）

両肩に荷物を背負って、一人で誰も知らないこの町に踏み込んだ日から、いつの間にか4年が経ちました。入学式の時、周りの賑わいの様子を横でそっと見つめていた自分の心境を未だに忘れられません。そうして夢と不安が混ざり合った留学生活の幕が開きました。

生まれて初めて親元を離れ、全く新しい異国の環境にさらされた私は、最初右も左も分からず、一人で散々戸惑ったり、ぶつかったりしました。日本語の日常会話はできていたものの、先生と周りの同級生たちの早口の話は聞き取れず、授業についていくのに必死でした。一方、家庭の事情で両親からの支援をあまり受けられず、一日も早くアルバイトを始めなければなりません。高校を卒業したばかりで、何の生活の経験もなかった私にとって、アルバイトをすることも大きなチャレンジでした。怒られる日々でしたが、掛け持ちで旅館や居酒屋や和食屋など「日本らしいところ」で働く中で日本語は上達し、そのうえ、日本人の価値観や考え方についても理解が深まりました。また同級生の友達に恵まれ、クラスにも徐々に馴染むことができました。さらに、運よく奨学金をいただけたことによって生活にも余裕ができ、他の日本人学生と同じように旅行に行ったり、ボランティア活動に参加したりして、学生生活を満喫することができました。

本年度もこの3月で奈良女子大学・大学院を卒業する留学生が沢山います。入学から卒業までを振り返って頂きました。

若い時の苦労はお金を払って買うものだと言いました。気楽とは言えない4年間でしたが、この奈良女子大学で私は、人として成長していく上でかけがえない経験をさせていただき、そのおかげで最高の幸せを味わうことができました。今までの留学生活を支えていただいた多くの方々に厚くお礼申し上げます。そして、今度は私も誰かの役に立てるような、その恩返しができるような人になるよう、これからも頑張り続けます。



日本語スピーチ大会



## 恋都祭に参加して、奈良女子大学の受験を決めました

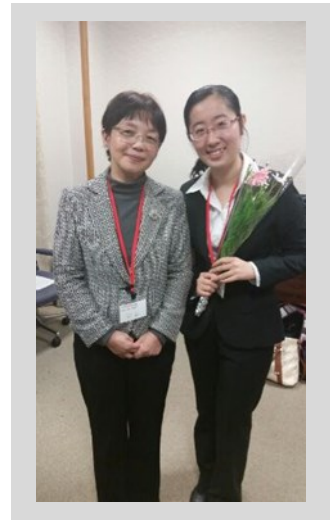
**王 雪婷** 生活環境学部住環境学科 (中国)

私は中国の山東省の煙台市から来て、奈良女子大学で4年間の大学留学生活を送ってきました。最初に奈良女子大学に留学したきっかけは、見学の時、恋都祭に参加して、劇や料理など学生の活躍している姿を見て、ここだったら楽しい勉学の生活ができると思い、奈良女子大学を受験すると決心しました。2011年の4月やっと奈良女子大学に来ました。奈良は自然に恵まれているところだと思います。春の桜、夏の藤、秋も紅葉と冬の雪、いずれも感銘を受けるほどきれいです。美しい景色だけではなく、かわいい鹿もいる。春日大社には1200も鹿がいる。奈良女子大学の構内や学生寮の中もたまに寄ってくる鹿を見つかけられます。

奈良女子大学の勉学の生活で優しい先生と友達と出会いました。住環境を勉強するために、時々夜中まで模型を作る必要がありますけど、同級生のみなさんといつも住環境の製図室に集まって、一緒に作業しながら、食べたり、生活中的の出来事を話し合ったり、外国人である私さえ全然孤独を感じていない勉強の生活を送りました。文化の差があるために、指導教授の先生はいつも他の人より力をかけて、日本語の意味や日本の文化習慣まで詳しく熱心に説明していただきました。

本当に恩師と同窓に感謝しています。この留学の4年間振り返ってみると、奈良女子大学で留学生活を送ってきて本当に良かったと思っています。

ここで国の同じ年の子が体験できないことをして、恩師にたくさんのことを教えていただいて、たくさんの親友ができて、本当に意味がある4年間を過ごしました。



恩師と

時間を経つのは早いものです。初めて大学の正門から入って、奈良女子大学の一員になった日はまるで昨日のことです。

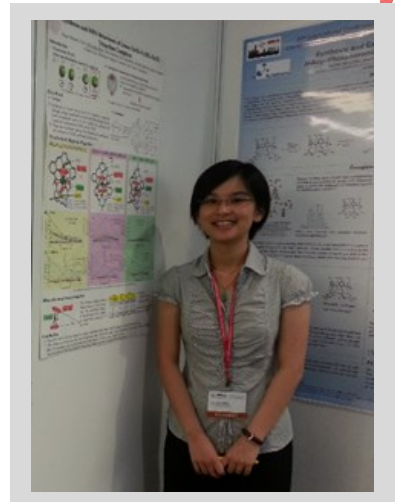
あっという間に4年間を過ごしました。4月から社会人の生活が始まりますけれど、大学の四年間を忘れる事なく大学でもらった経験を活かして、奈良女子大学の誇りを持って、立派な社会人になるように頑張っていきたいと思います。

## 周りの人々に相談し沢山の課題を乗り越えてきました

**テン ポーリン** 人間文化研究科 博士前期課程 化学専攻 (マレーシア)

奈良女子大学に入学してから、あっという間に6年が経ちました。入学する頃はまだ日本語能力が低いいため、言葉もちゃんと聞き取れず、授業内容に追いつけるのか、友達が出きるのか、不安がいっぱいでした。国際課のチューター制度のおかげで、同じ化学科に所属している西田さんにレポートの書き方や電話の対応や日常生活の悩みなどを相談しながら、不安を1つずつ解消していきました。僅か一年間のチューター制度でしたが、大変助かりました。その一年間でかなり日本での生活になじみ、日本人や留学生同士の友達もできたので、残りの5年間も楽しみ大学生活を過ごしました。

自分自身は理学部の学生で学部の4年生から研究室配属され、自分の研究テーマに向ける毎日実験と測定データの処理といった作業をやりながら研究生活を過ごしました。研究は決して実験ばかりではなく、時には雑誌会、他大学との共同セミナー、学会発表を通じて最新の技術論文を紹介したり、自分の研究結果を報告したりして、自分のプレゼンテーション能力を磨くチャンスにもなります。



学会でのパネル発表

休みの日は友達と京都で遊んだり、大阪で買い物したり、映画を見たり、アルバイトに行ったりしてバランスよく学生生活を過ごしました。

留学生活は決して平坦なものではありませんが、一人で悩むより、周りの人々と相談しましょう。私はそうしてたくさんの課題を乗り越えてきました。では、皆さんも良い留学生活を送れるよう心からお祈りします。

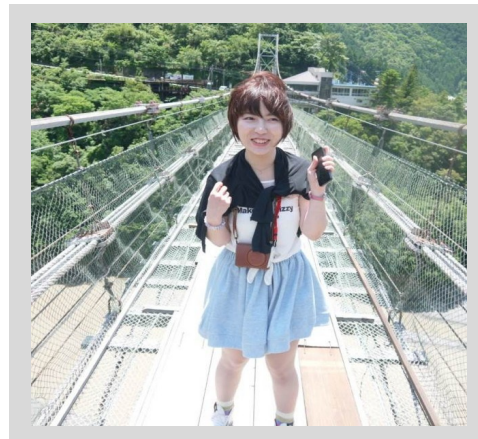
## 大学生活の満足感は語りきれません

### 李 科佳 生活環境学部食物栄養学科 (中国)

奈良女子大学では、国際課の先生を始め、多くの先生方のもとで、机上では学べない貴重な体験をさせて頂き、多くのことを学び充実した日々を過ごすことができました。

初めて奈良女子大学へ来たときのことを思い出します。留学生試験に受かってから、2次試験でここへ来たときでした。小さい学校ですが、とてもアットホームな雰囲気です。今でも歴史ある古都奈良で学生生活を送ったことは間違いはなかったと思っています。東大寺などといった世界遺産を身近に感じ、四季の顔を持つ奈良に心打たれます。また学内に重要な文化財-記念館があります。最近日本ドラマ『ごちそうさん』のロケがこの記念館前で行われました。2001年韓国ドラマ『スターの恋人』もこの記念館を舞台にしています。実にその時から、ずっと奈良女子大学に憧れていました。

大学生活の満足感は語りきれません。奈良県の北部から南部十津川までの巡りはもちろん、県内や学校内の行事も数多く参加しました。モクモクファームでウィナーを、小豆島でオリーブオイルを作ったりしました。苺狩り、宇治茶摘みなど…。3回生の校外実習(小学校・保健所・大学医院)も印象深かったです。



十津川の吊り橋で

4回生の研究室も一見変わっていましたが、とてもまじめでユーモア溢れるところでした。ここで真の学生生活を送ることが出来ました。週一のゼミ、英語論文会、仲間外れのゲーム、また月1回のランチdiscussion、個人のプレゼンなど、非常に勉強になりました。担任先生の厳しさの中にある優しさ感謝しています。日本の父と言っても過言ではないです。

クラスの子の女子力の高さも尊敬し感心しています。手作り料理、ケーキ、レストラン並みの美味しさ、その上栄養のバランス、見た目にも配慮しています。日本人の長寿は世界一というのは、これが理由ではないかと思います。(つまり美意識と健康意識)

これからも奈良女子大学で学んだことを今後どう生かされるのかといったことを想像しながら、一層励みたいと思います。

## 海外協定大学への教員派遣事業報告 (ベトナム・ハノイ大学)

2014年12月8日からベトナム・ハノイ大学に教員派遣事業で同行した学生から授業の様子やハノイ大学の学生の反応など報告がありました。

### ハノイ大学訪問

#### DONG THI THANH NHAN 人間文化研究科 博士前期課程 国際文化社会学専攻 2回生



鈴木広光先生の講義

私は2014年12月8日から12月14日にかけての一週間、鈴木先生の集中講義の補助とベトナム現地調査を目的に、ベトナムに同行させて頂きました。

まずは鈴木先生と大学院生の鈴木さんとベトナム・ハノイ大学に行きました。ハノイ大学では、12月9日から11日までの3日間、鈴木先生の集中講義が行われました。講義日程は一日2コマ、午後14時から17時までの2時間でした。講義参加者はハノイ大学の大学院生たちで、皆は働いてから大学院を通過しているようで、忙しそうでしたが、皆日本語が上手で、日本語研究に関するやる気が溢れていると感じました。

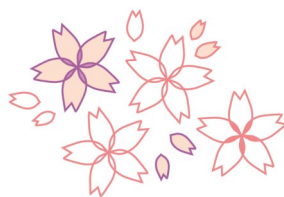


講義の内容は「日本語らしさの文法」について、4課に分けられました。第1課は「私」のテーマで、「私は」を省略する・話手のゼロ化について説明されました。第2課は「あなた」の使い方や聞き手のゼロ化の話でした。つづけて第3課はよく使われている「くる」と「いく」の動詞の使い方について説明されました。

最後に第4課は「あげる」、「くれる」、「もらう」のテーマでした。それぞれのテーマで詳しい説明と分かりやすい例があげられ、皆さんに質問して答えてもらうの形でした。皆さんからいろいろご意見があり、盛り上がった雰囲気です。

今回は時間を設けて奈良女子大学の紹介は詳しくできず、少し残念だと思いましたが、休憩時間にハノイ大学の皆さんと喋ったりして、奈良女子大学に留学したいと興味を持っている方が多くおられます。特に、大学院教育に関する奈良女子大学とハノイ大学との協定の話も出ました。皆は楽しみにしていますと言っていました。

最後の授業が終わって、鈴木先生は皆と記念写真を撮りました。皆からの感想などを聞け、来年もこういう集中講義に参加したいという気持ちが伝わっていました。そして、集中講義に参加させて頂いて、また、自分の現地調査できる時間も頂き、国際交流センターをはじめ、先生方、皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。



## ベトナム現地調査

**鈴木 小春** 人間文化研究科 博士前期課程 言語文化学専攻 2回生

12月8日～12日までハノイ大学日本語学科に派遣され、鈴木広光先生の集中講義の補助に行ってきました。今回の受講生はみなさん院生だったため、午前中はそれぞれベトナムの方に日本語を教える仕事などをされており、授業は午後より行われました。講義のテーマは「日本語らしさの文法」というもので、普段日本語をベトナム人に教えている学生の皆さんには非常に興味深いものであったと思います。

具体的な講義内容は、はじめに「私」「あなた」という人称の言語化の有無について、次に「食べていく」「買ってくる」といった補助動詞「てくる」「ていく」について、そして最後に「あげる」「くれる」「もらう」について、それぞれ文法上誤りのない表現であっても、「日本語らしさ」の観点から見てどちらの方がより自然かを考えるというものでした。

日本で英語を学習する際、はじめに文法から学ぶことがほとんどだと思います。ベトナムでも日本語を学習する時には、文法の学習から行うとのことでした。今回はその時に教わる「正しい」日本語の例文が、文法上誤りではないけれども、母語話者である日本人にとっては不自然だと感じられる例があることなどを講義されたのではじめて戸惑いを見せる方もおられました。ただ、難しい内容ではあったものの、先生の発問に対しみなさん懸命に考えて自分の言葉で説明して意見交換をされていたのが印象的でした。これからもベトナムの方に日本語を教える受講生の皆さんにとって、今回の講義は日本語の本質を考えたり、「生きた」日本語を知ったりする上で非常に有益だったと思います。

私の方もまた、外国の方が「日本語らしさ」を学ぶ上で、どのようなところに引っ掛かるのかを眼の前で見ることができて、非常に勉強になりました。そして日本に興味をもってくださっている学生の皆さんの意識の高さに触れたことは、今後も研究を続ける私にとってたいへん意味あるものでした。

今回の出張では、授業の入っていない時間には旧市街を散策したり、博物館や遺跡などを見学させていただきました。生のベトナムの文化・人に触れることができました。今まさに発展している国らしく、とても活気があったのが印象に残っています。留学生を迎えるばかりでなく、是非本校からもこのエネルギーに満ちたベトナムに留学する方が増えてほしいと思います。



ハノイ大学の学生さんと

# トビタテ！ 留学JAPAN 日本代表プログラム

官民協働海外留学支援制度である「トビタテ！ 留学JAPAN」第2期プログラムに本学の学生2名が選ばれました。このプログラムは、日本から海外へ留学する学生を支援する制度です。申込みから選考、壮行会までの流れを選ばれた2名に伺いました。ぜひ自分も留学したい！という方、先輩達のプランを見て、応募を考えてみませんか？

**山田 美奈都** 生活環境学部住環境学科 2回生

## その1. わたしの留学プラン

私は本学の協定校であるノースカロライナ大学への交換留学と、アメリカでのインターンシップなどの実践活動を融合させたプランを計画しています。まず、ノースカロライナ大学では専攻である住環境にまつわるコースと新たに挑戦したいビジネス、特にマーケティングのコースを履修します。それに合わせ、世界の中心ニューヨークで建築ビジネスをしている会社とフロリダで韓国人女性がオーナーである建築事務所でインターンシップをすることで、実際に女性が海外で、また未だに男性中心である建築業界で働くということを経験してきます。



トビタテ！プロジェクトディレクター 船橋様と

## その3. 試験の内容

大きく分けて第一次審査は書類審査、第二次審査は面接(1:1)、ディスカッションとプレゼンテーション(各5,6人グループ)でした。このプログラムの提出書類は膨大な量でしたが、周りの人のアドバイス、フィードバックを受けながら改良し準備しました。また、第二次審査は人の話に耳を傾け自分の意見をしっかりと人に伝えることができるか、自分のプランをより魅力的に人に伝えることができるか重要な気がしました。

## その5. 最後に

私が今、日本代表プログラム二期生の一員として一番よかったと思うことは分野は違ってもなにか自分の夢があってそのために一生懸命に頑張る仲間が日本中に増え新たなコミュニティができたこと、また今から留学するまで、留学中、そのあともずっと、これから始まる新しい”出会い”の可能性が無限大に広がっていくことです。今回の研修を通して見つかった私の譲れない部分である”人間関係”をもっともっと大切にしたいと利用してひとりでも多くのひとと楽しい時間を共有できればと思います。



事前研修の様子

## その2. 今後の目標

正直なところ、私は今の時点で将来何がしたい、どんな職業につきたいなど具体的なものはありませんが、女性としてしっかり輝いてアクティブに楽しんで働きたいと思っています。そのため、今は住環境について学んでいますが、この留学を通して、本当に自分のしたいことは何かを考え、これがまた新たに自分のしたいことを探し始めるきっかけになればと思います。あとは世界中に友達を作ること！この留学中に友達1000人作ります(´o`)／

## その4. 事前研修の内容

二日間とにかく朝から晩までほぼ休憩なしのスケジュールでした。5、6人のグループに分かれディスカッションしたりプレゼンテーションしたり、またヤンググローバルリーダーの方々をお招きしたパネルディスカッション等、とても充実した濃い二日間でした。それまでは自分のプランの見直しばかりでしたが、二期生のみんなの計画を知りまたお互いブラッシュアップすることで自分のプランの強み、弱みを見直せました。さらに、研修を通して自分が本当に大切にしているものとは何かをじっくり考える時間がありました。それまで自分でも気づいていなかったその自分の軸を中心にプランを考え直すことができました。



## その1. わたしの留学プラン

私の留学のテーマは、日本の新しい観光のあり方として、エコツーリズムの日本的導入・普及の方法をさぐることです。留学の主な目的は、①ツーリズム産業についての学習②「おもてなし」できるレベルの語学力習得③エコツーリズムの現場体験の三つです。

そのために、米・ノースカロライナ大学グリーンズポロ校への交換留学（10か月）と、コスタリカでの環境ボランティア（1か月）を組み合わせたプランを計画しています。



事前研修のグループワーク

## その2. 試験の内容

一次審査は書類審査、一次審査を通過すると二次審査があり、主に面接を行います。まず書類審査があります。留学のプランや目的・理由等の基本的な質問項目に加え、今までに自分が困難を克服した経験についてや、留学後に自分が日本にどう貢献できるかについて等、さまざまな質問項目が設けられています。たくさん書かなければならないので大変ですが、この書類をきちんと作っておくと、後に続く二次審査にとても役立つと思います。

二次審査は①面接官と一対一の面接②グループディスカッション③留学計画のプレゼンテーションの3つを行いました。①の面接では、一次審査で提出した書類をもとに質問をされます。面接官は一般企業の人事担当者の方です。②のディスカッションは6人グループで行いました。わたしの時のディスカッションのテーマは、「地方からのトビタテへの応募を増やすにはどうしたらよいか」でした。③のプレゼンテーションは②のディスカッションと同じグループ内で行い、1人4分間で、その後1分間審査員からの質問の時間があります。発表の方法は自由で、プレゼン資料を印刷して審査員とグループのメンバーに配布したり、中には留学計画に関する小道具を見せながら発表する方もいました。

## その3. 壮行会の印象

壮行会では、文部科学大臣や支援企業の役員の方など様々な方のお話を聞かせていただきました。自分が奨学金を受けられるのはたくさんの方の支援があるからであり、留学後にどれだけ成長できるか、貢献できるかが重要なのだと強く思いました。壮行会後は、懇親会が開かれ、他のトビタテのメンバーと話す機会がありました。みんな留学の目的意識がはっきりしており、自分も頑張ろう、と気が引き締まりました。

## その4. 事前研修の内容

留学の成果を最大限にするためにどうすればよいか、を大きなテーマとして、1泊2日で研修を行いました。自分の「軸」を見つめなおしたり、日本について学んだり、アドバイスをもらって留学計画をブラッシュアップするなど、とても濃い内容でした。現在グローバルに活躍されている方々のパネルディスカッションでは、とても興味深いお話を聞くことができました。事前研修では学びだけでなく、他のトビタテのメンバーと交流が深められたのもとてもよかったです。みんなそれぞれ個性があり、尊敬できる方ばかりなので、トビタテのコミュニティを頼もしく、大事にしたいと思いました。

## 「トビタテ！留学JAPAN日本代表プログラム」とは

2014年からスタートした官民協働で取り組む海外留学支援制度です。

2020年までの7年間で約1万人の高校生、大学生を「トビタテ！留学JAPAN日本代表プログラム」の派遣留学生として送り出す計画です。派遣留学生は支援企業と共にグローバル人材コミュニティを形成し「産業界を中心に社会で求められる人材」、「世界で、又は世界を視野に入れて活躍できる人材」へと育成されます。

帰国後は海外体験の魅力を伝えるエヴァンジェリスト（伝道師）として日本全体の留学機運を高めることに貢献することが期待されています。

<http://www.tobitate.mext.go.jp/index.html>



# お茶の水女子大学グローバル協力センター 大学間連携イベント

## 「国際協力ボランティアを知ろう」

2015年2月12日(木)～13日(金)に国際協力機構(JICA)二本松青年海外協力隊訓練所の協力を得て、アジアやアフリカ諸国でのボランティア経験者や派遣前の訓練生との交流会と「福島的女子」の現状をはじめ復興に関する活動の講演会に本学学生5名が参加しました。

**野内 瑞生** 生活環境学部生活健康・衣環境学科 2回生

今回の研修で一番変化したことは、ボランティアに対する考え方である。私は今まで、ボランティアをする人は、自分のエゴや考えを持たずに、相手を思いやる気持ちだけでボランティアをしなければならないと思っていた。そのため視野を広げるため、経験の一つとしてなど自分のための側面を持ったボランティアはすべきではないのではないかと考えていた。ボランティアは近づきにくく、簡単に手を出してはならないものだと感じていたのだ。しかし今回の研修で講義を受けて、ボランティアは、相手が喜び、組織(たとえばボランティアを支援している団体など)が喜び、そして自分が楽しむこと、

この三つのうちどれも欠けてはならず、そのバランスが重要なのだと知った。そのため、ボランティアは相手のためにすることではあるが、自分のためになってもよい側面があることを知って、すこし身近に感じられるようになった。ボランティアをする側が楽しくなければボランティアは続かず、ボランティアをする側も受ける側も恩恵を受けることができるからこそ、ボランティア活動は持続していき真に相手のためになるのではないかと感じた。

(本文抜粋)

## ダブルディグリー・プログラム 学位授与式

平成23年2月に奈良女子大学とグッティンゲン大学(ドイツ)の間で締結された共同博士学位指導に関する協定にもとづき、平成23年度から両大学に同時在籍を開始し、平成24年4月から平成26年3月まで奈良女子大学に滞在し研究していたエリザベット・パンゼンバックさんの成果がまとまり、両大学が博士(理学)の学位を認定しました。本学での公聴会と学位授与式を含む報告会を3月30日に行いました。

現在、ベルギー王国ルーヴェン大学とのダブルディグリー・プログラムの派遣学生も募集しております。出願締切：4月10日

●詳細 <http://www.nara-wu.ac.jp/international/ici-ecp.htm>



授与式でのエリザベットさん

## センター及び国際課の活動

- 2015/1/22 ニュージーランド研修説明会第5回  
学長主催修了・卒業留学生懇談会
- 2015/2/16 ニュージーランド研修最終説明会・  
TOEFL-ITPテスト
- 2015/2/20 ニュージーランド研修出発
- 2015/2/27 JENESYS2.0 インドネシア人学生来訪  
「メディアを学ぶ学生同士の国際交流会」
- 2015/3/20 ハント大学文学部長来訪  
「ベルギーで人文学を学ぶ」イベント  
ニュージーランド研修帰国
- 2015/3/25 ニュージーランド研修・TOEFL-ITPテスト

**編集後記:** ニュージーランド研修30名が無事に研修を終えて帰国しました。視野が広がり、英語力向上の為にモチベーションに繋がったと報告がありました。(編集者:Yoko Sen)

## センター来訪者

- 2015/3/17  
ヒラリア・ゴスマン氏  
(ドイツ、トリア大学 第二学部 日本学科 主任教授)
- 2015/3/20  
テレーズ・ド・ハンブティンヌ氏  
(ベルギー、ハント大学 名誉教授)  
マルク・ボーネ氏  
(ベルギー、ハント大学 文学部長 教授)

奈良女子大学 国際交流センター

NEWSLETTER 2015年3月発行

〒630-8506 奈良市北魚屋東町

TEL: 0742-20-3736

Email: [iec@cc.nara-wu.ac.jp](mailto:iec@cc.nara-wu.ac.jp)

<http://www.nara-wu.ac.jp/iec/index/>